

我が国におけるラクロスの普及・発展に関する一考察
A study on the development and popularization of Lacrosse in Japan

1K07B097-1 櫻井 辰輝

指導教員 主査 吉永武史 先生 副査 堀野 博幸 先生

【本研究の動機】

私は、大学生時代、体育会ラクロス部に所属していた。このラクロスというスポーツはどこでどのようにして生まれたのか。そして、どのように日本の中で発展していったのか。このことに興味を持ったのが、本研究を進めようとしたもっとも単純な動機である。今まで私は、水泳、野球、サッカー、ラクロスと多種多様なスポーツを経験してきた人生だったが、ラクロスが最も自分を変え、成長させてくれた。そこで、今までの自分の大学生活において、大部分を占め、私を精神的にも人間的にも大きく成長させてくれたラクロスというスポーツに感謝し、日本のラクロス界に恩返しをしたいと思い、自分に何ができるのかを考えた。その時にまだまだマイナースポーツであるラクロスがどうすれば普及していくのか、普及させるための方法を明らかにしていきたいと思った。

【本研究の目的】

本研究では、ラクロスの起源から変遷、そして現状までをたどっていく。そして、バックグラウンド、特徴を踏まえた上でラクロスというスポーツの競技特性を考察していく。そして、日本とアメリカ、それぞれのラクロスの現状を把握し、比較することで、日本でのラクロスの普及活動を検討していくことが本研究の目的である。

【本研究の方法】

本研究は関連する文献を講読し、必要に応じては、海外文献もその対象としながら行う。ただ、ラクロスについての文献は圧倒的に少ないため、情報量が少ないところに限っては、インターネット上の情報を吟味し、信用のおけるものを参考にしていく。

【各章の概要】

<第1章>ラクロスの起源と変遷

ラクロスの歩みは、1636年にイエズス会の宣教師ブルブフが、ジョージア湾（ヒューロン湖）近くに住むヒューロン族のゲームを見て、教会関係の報告書に<クロス>の名称を用いたのが最初とされている。また、ラクロスはその当初から、成年男子の軍事訓練として、あるいは部族間の競争的結合関係を示す行為としての儀礼的球戯として位置づけられ

てきた。1825年には北米インディアンのルールは完全に変わり、訓練ではなく、ゲームとして7人制で二つのゴール間は約45m～54mと今日の約半分くらいになったと言われている。そして、ラクロスは、カナダの白人社会に普及し、近代ラクロスとして発展していく。

<第2章>日本とアメリカのラクロスの比較

日本では、現在会員数1万5千人を突破している。しかし、アメリカでは1998年にすでにラクロス人口は23万人である。この差は何なのか、日本での普及方法の参考になるかと思い、アメリカの普及方法と比較して考えていきたい。

しかし、アメリカ独自の文化やアメリカと日本ではラクロスの歴史が100年も違うのであるから、そのまま比較しようとするのではなく部分的に見習うか、もしくは反面教師にするのが現段階ではベストだと私は考える。

<第3章>ラクロスの普及について

学校体育、生涯スポーツの2つの面から考察することにした。

今日の子供たちの体力は約20年前に比べて明らかに低下している。体力低下の子供たちが増えている中で学校体育にソフトラクロスの導入を提言するために、ラクロスの多種目の関連技能習得の点から述べた。

生涯スポーツの面からは、ソフトラクロスは投げる、捕る、走るといった様々な動きを要する全身運動であり、年齢や体力に応じて、コートサイズを変えることもできるので誰でも楽しむことができるスポーツであることから、生涯スポーツに適していると考えられる。

<結章>本研究のまとめ

ラクロス起源や変遷、現状を把握したうえで、日本とアメリカを比較、考察したことで更なる普及に向けた示唆を得ることができた。また、日本のラクロスを普及させていくためには、「競技者数の急激な増加」、「指導者」、「ラクロスの競技特性」などの問題を解決していかなければならない。